

外国語科と構成的グループエンカウンターを
融合させた学級づくり
一つながりのある学級集団をつくるために一

京都教育大学大学院 連合教職実践研究科
教職実践専攻 生徒指導力高度化コース
166035 上田雅士

外国語科と構成的グループエンカウンターを融合させた学級づくり 一つながりのある学級集団をつくるためにー

上田雅士

生徒指導力高度化コース

要約：学校現場では従来の講義形式の授業形態ではなく、「主体的・対話的で深い学び（以下アクティブラーニング）」といわれるような他者と協同しながら学んでいく授業形態が求められている。しかし、児童同士の人間関係の希薄化や授業時数不足といったさまざまな要因からこのような授業形態での成果をあげることのできている学級はそう多くはない。このような授業を行うために、つながりのある学級集団が必要であると考え。そのため、人間関係づくりを目的に行われる構成的グループエンカウンター（以下SGE）を外国語科の授業と関連させながら、朝学習の時間に実践した。班など小グループでの交流を目的としたエクササイズや学級全体での交流を目的としたエクササイズなど、学校生活や児童の実態に即したエクササイズを行った。児童の記述の分析から、「英語のほうが話しやすかった」、「話したことがなかった友達と話すことができた」等の成果をみることができた。そこから、外国語科の授業において、SGEを行うことにより、児童同士のつながりをつくることのできるのではないかと考えた。

キーワード：学びあい 学級づくり 構成的グループエンカウンター（SGE） 外国語科
モジュール授業

1. はじめに

2020年度から施行される次期学習指導要領では、現行学習指導要領の枠組みや教育内容を維持した上で、知識の理解の質をさらに高め、確かな学力を育成することが求められている。また、知・徳・体にわたる「生きる力」を子どもたちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の3つの柱で再整理し、「何ができるようになるか」ということを明確化している。「主体的・対話的で深い学び」と言われているように、従来の講義形式の授業ではなく、他者と協同しながら学ぶといったアクティブラーニング型の授業が求められている。近い将来、教壇に立つ私たちはアクティブラーニング型の授業を行い、児童たちが協同しながら学ぶことの楽しさを得られるような授

業を行っていく必要がある。

筆者は、大学院 1 年次の専門実習 I においてアクティブラーニングを用いた効果的な授業をすることができなかった。実際に、ペア学習において、一方的に教えたり、答え合わせに終わっていきたりすることから、お互いの学びを深めることはできていなかったと振り返り、その要因として児童の表現力が低く、対話することが苦手であるからだと考えていた。しかし、互いに表現力が低いと考えていた児童のペアにもかかわらず、きちんと話しあうことができていたペアが散見されたことから、児童同士のつながりがあれば、ペア学習をはじめとするアクティブラーニングを取り入れた活動も効果のあるものになると考えた。大場（2015）によると、「協同学習に基づく授業を展開していくためには、信頼に基づいた人間関係が教室の中に築かれていることが大切である（中略）」としている。そこで、人間関係づくりに用いられる SGE を実践し、学級の集団づくりを図っていく。2020 年度の学習指導要領改訂により教科化される外国語科と関連させながら今回の実践を行う。外国語科で実践する理由として、ゲームやペア学習など児童同士の交流する機会が多いことから、授業の中で SGE を違和感なく行えると考えた。そこで筆者は、外国語のモジュール授業の時間を用いて、英語を使った SGE の実践を行っていきたい。短時間のエクササイズを週 1 回程度行うことにより、児童たちはこれまでとは違った新たな視点で外国語科の授業に取り組むとともに、児童同士のつながりをつくっていけるのではないかと考える。尚、今回の SGE はエクササイズに、英語の視点を入れ、シェアリング等は日本語で行うものとする。また、小学校学習指導要領特別活動編にも「意図的にあるグループ作業を行わせ、ここで感じたことなどを率直に話し合うことにより人間関係を形成するために大切なことを理解させる手法」や「人間関係を形成するための基本的な知識や方法などについて、ロールプレイングやグループで練習をするような手法」とあるように、SGE の目的と特別活動の目的が類似していることから、学校現場にも導入しやすい。

2. つながる集団

2.1 学びあいのある授業

石田ら（2016）は、「学びあいのある授業とは、子ども同士の関わり合いの中で、お互いに教えあうだけでなく、意見の交流等を行うことにより、考えが広がったり深まったりする授業である」と定義している。佐藤（2003）によると、「ペア学習といった学びあいのある授業は学力の高い子どもには、未知なる課題を自分の手で切り開こうとする意味での想像力を高める訓練の機会となり、学力の低い子どもには、学力を引き上げることなどを期待する」としている。また、

佐藤の実践の中で、「自信のない子どもが友達に気軽に助けを求める光景が見られるようになった。仲間に依存することで、分からなかったことが分かり学力の向上にもつながっている」とあり、学びあいの学習の成果がみられる。

このような授業が言われ始めたのは、社会において求められる力が変わってきたためである。これまでは、基礎学力や知識をつけることが社会において求められてきたが、現在では未来社会を切り拓くための資質・能力といった生きる力を身に付けることが求められている。これは、予測不能な現代を生きる上で、既存の知識だけでなく、常に自ら考え、行動していく必要があるからである。また、次期学習指導要領にも、「主体的・対話的で深い学び」という記述が見られ、知識を知識として暗記で留めておくのではなく、新しい知識や経験を自分の既存の知識や生活と結び付けていく必要があることが示されている。また、ラーニングピラミッドのもととなったThe“Cone of Experience”（図1）からも、教えたり、体験したりする学びあいは知識の定着率は高いとされている。このような学びを成立させていくために学びあいのあるアクティブラーニング型の授業が必要となってくる。

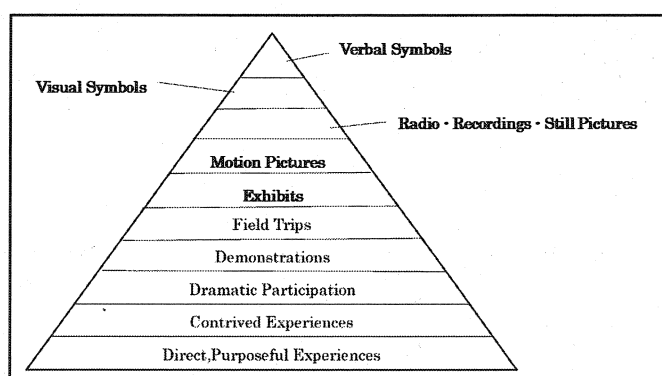


図1 The “Cone of Experience”

出典：Dale, Edgar (1946) *Audio-Visual Methods in Teaching*: Dryden Press より筆者作成

学びあいが成立していない学級ではわからない問題などに対し、問題の答えを教えているだけのことが多い。教える側も答えを教えたことに満足し、教えられた側もやり直しが終わったことに満足し、あくまでその場を解決することを目的としていて、学びあいを行っているとは言えない。しかし、学びあいが成立している学級では、分からないところを教え、教えられる側も分からないところを質問し、理解しようとしている。1人に対し、2～3人付くこともあり、その姿はまるで個別指導をしているようである。また、1つの問題やテストのやり直しに対し、納得するまで何十分と話し合っている様子がよく見られる。学びあう学級の児童たちには、さりげない優しさで結ばれた関わりがあった。

しかし、このような授業を学校現場には現在求められているものの、実際の学校現場には、成果のでていないところが多い。その理由として、講義形式の授業や形だけのアクティブラーニングであるなど理由はさまざまではある。学校現場の教師からも、本当は時間をとって、話し合い活動や学びあいを行いたい、授業時数が限られているため、どうしても従来の講義形式の授業となってしまうとの声もある。佐藤によると、『教師は授業において、教材と子どもをつなぎ、子どもと子どもをつなぐことを求めているが、教師の活動を検証すると、「つなぐ」よりも「切る」ことに終始している場合が多い』としている。児童同士がつながるだけでなく、教師も児童とつながっていこうとする姿勢が求められる。

2.2 構成的グループエンカウンター（SGE）

國分（1999）は、「エンカウンターとは、ホンネとホンネの交流や感情交流ができるような親密な人間関係をいう。そのためにリーダーの指示によって行うエクササイズを通して、集団でエンカウンターを体験することを構成的グループエンカウンターという。」と定義している。エクササイズはメンバー相互の自己開示を介して、自他理解や自己受容、感受性、自己主張、信頼体験、役割遂行の促進をねらいとしている。いずれのねらいも「感情体験を伴った気づき」を重視している。SGEはこの気づきを基盤にしながら、「ふれあいと自他理解」を目的としている。SGEには、「インストラクション」、「エクササイズ」、「シェアリング」の3つの柱があり、その中で、「シェアリング」が最も大切とされている。エクササイズを通して、気づいたり、感じたりした、自分のことや他者のことを本音で伝え合い、気づきや感情を明確化し、ねらいを定着させるはたらしきを持っている。

3. 小学校の外国語教育

3.1 2020 年度教科化のねらい

2020 年度施行の次期学習指導要領の改訂では、グローバル化に対応した教育環境づくりを進めるとともに、2020 年の東京オリンピック・パラリンピックに向け、子どもの英語による日本文化の発信、国際交流・ボランティア等の取り組みを強化するために、英語教育全体の抜本的充実を図ることをねらいとしている。そこで大きな変化として、高学年の外国語教育の教科化があげられる。これまで高学年では外国語活動として、中学年では総合的な学習の時間の国際理解教育の一環として外国語教育がそれぞれ行われてきたが、今回の改訂により、高学年が外国語科、中学年が外国語活動として、これまでの外国語教育の位置づけとは変わってくる。これは、英語教育

の目標・内容等を以下の表1に示した。このように教科化されることによって、小学校・中学校・高等学校を通じて一貫した学習到達目標を設定することにより、英語によるコミュニケーション能力を確実に養うことができると期待されている。

また、次期学習指導要領の外国語の目標では、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動を通して、コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(以下省略)」と示されている。「主体的・対話的で深い学び」と言われるように、学校現場では他者と協同しながら、学ぶことなどが求められている。コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を身に付けることを目標としている外国語教育の教科化は従来の教科の指導に影響を与えやすい。

表1 現行の学習指導要領と次期学習指導要領の目標・内容等

	現行の学習指導要領 (平成20年3月公示)	次期学習指導要領 (平成29年3月公示)
中学年	—	・活動型(年間35時間) ・学級担任を中心に指導 ・目標:英語を用いてコミュニケーションを図る楽しさを体験することで、コミュニケーション能力の素地を養う
高学年	・活動型(年間35時間) ・学級担任を中心に指導 ・目標:コミュニケーション能力の素地を養う	・教科型(年間70時間) ・専科教員の積極的活用 ・目標:読むことや書くことも含めた初歩的な英語の運用能力を養う

出典:文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2016)より筆者作成

3.2 モジュール授業

モジュール授業とは、10分、15分などの時間を単位として、取り組む学習形態である。モジュールとは、時間等の「単位」を意味している。「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2016)によると、コミュニケーション能力の基礎を養うのに必要な一定時間(年間70単位時間、週2コマ相当)を確保し、モジュール学習も活用しながら、週3コマ程度を確保することが示されている。

表2 小学校5・6年生におけるモジュール授業を用いた時間割の例

	月	火	水	木	金
モジュール					
1校時					
2校時					
3校時					
4校時					外国語
	給食・昼休み	給食・昼休み	給食・昼休み	給食・昼休み	給食・昼休み
モジュール	外国語		外国語	外国語	
5校時					
6校時		外国語			

出典:文部科学省「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」(2016)

表2に、モジュール授業を用いた時間割の例を示した。このように週3回の英語のうち2回を45分の通常の授業時間に実施し、残りの1回を15分ずつ3回行うというものである。モジュー

ル授業では、聞き取りや発音の練習など、授業で学んだ表現等の反復により定着させるための活動が適しているとされている。現在、モジュール学習を行っている学校現場では、絵カード・ビデオ・自作のテキスト・市販のテキストを使った学習が多く行われている。

4. 英語を活用した構成的グループエンカウターの実践

4.1 学級の実態

本実践は、京都府の公立小学校第6学年31名（男子15名、女子16名）の学級で行った。学習面では、多くの児童が授業や活動に熱心に取り組むが、やや受動的に動く姿が多くみられる。5年生までに受けてきた授業でも、教師主導の講義形式の授業が多く、授業の中でペア活動やグループ活動に慣れていないがため、授業にそのような活動を取り入れても、何を話せばよいか分からないといった様子であった。しかし、「1日1回は、発表しよう。」というめあてのもと、児童たちは意欲的に発言し、言われたことには熱心に取り組むことができる。また、この学級には中学受験を控えた児童たちが多いこともあり、学力に差があることが課題である。そのような児童の中には、ペア学習やグループ活動は、不必要であるという考えを持っている児童もいる。

4.2 実践記録

本実践は、大学院2回生の専門実習Ⅱの期間中（4/6～5/26）にモジュール授業での英語を用いたSGEの実践を行った。既習の英語の文法や単語を使ったSGEを1回あたり約15分で朝学習の時間を活用した。また、毎回の活動の後に、振り返りカードを書かせ、児童の素直な感想や気付いたことを全体の場で交流させた。全9回のSGEをそれぞれ学校で設定した月間生活目標や学校生活などと結びつけながら、課題をもって行った。第1回～第2回は、年度初めであったため児童同士、児童と教師のつながりをつくることと「気持ちのいいあいさつをしよう」という生活目標であったことからあいさつを取り上げたエクササイズ、第3回～第6回は、5月中旬に修学旅行を控えていたため、隣の児童や班の児童と関わり合うエクササイズ、第7回～第9回は、修学旅行も終わったことから学級全体の交流を目指したエクササイズを設定した。表1は実際に行ったエクササイズの詳細を示した。

表3 エクササイズの実施詳細

	エクササイズ	ねらい	活動内容	英語使用
1	Hi !	感受性の促進	学級の児童とハイタッチしながら、あいさつをする。	あいさつをする際に“Hello”や“Hi”と英語であいさつをする。
2	最高のあいさつ	自己理解	班であいさつを行い、どのようにあいさつしたら、気持ちいいかを考え、発表する。	あいさつをする際に“Hello”や“Hi”と英語であいさつをする。

3	聖徳太子ゲーム	信頼体験	一人ひとりが一音ずつ分担し、一斉に言う。それを聞いて、他のグループが何の言葉かを当てる。	聞き取った言葉を英語に訳して、答えさせる。
4	二者択一	自己理解 他者理解	簡単な二択の選択肢を示し、どちらのほうが好きかを考え理由とともに交流する。	二択の選択肢を英語で表記する。
5	サイコロトーク	自己理解 他者理解	サイコロの出た目に応じて、お題について、話し、交流する。	お題を感情を表す英語で行う。
6	二者択一	自己理解 他者理解	簡単な二択の選択肢を示し、どちらのほうが好きかを考え理由とともに交流する。	二択の選択肢を英語で表記する。
7	好きなものビンゴ	自己理解 他者理解	教科でビンゴカードを作り、相手に好きな教科を尋ね、相手が答えた教科のマスに色を塗り、ビンゴゲームを行う	英語でやり取りを行わせる。
8	バースデートレイン	感受性の 促進	4月生まれから順に身振り手振りのみで並ぶ	答え合わせの際、自分の誕生日を英語で答えさせる。
9	猛獣狩り	信頼体験	猛獣狩りを行い、できたグループでお題について話し合う	英語版の猛獣狩りを行う。

1 回目のエクササイズを行う前と 9 回目のエクササイズの後アンケートを取り、児童の変容やふりかえりを見た。今回の実践では、つながりのある学級集団づくりという目標があるため、SGE のねらいの中の「他者理解」・「自己主張」・「信頼体験」・「感受性の促進」といった相手を意識したエクササイズを行った。

(1) 第 1 回～第 2 回

第 1 回目のエクササイズ終了後の振り返りには、「あいさつをすると気持ちよかった」や「話したことない人と距離が縮まった」などと肯定的な意見や「話したことがない児童がいた」や「久しぶりにあいさつをした」といったコメントもあった。第 2 回目には、最高のあいさつというエクササイズで、どのようにしたらもっと気持ちよくなるのかということを、班ごとに交流した。これは、あいさつをできる児童が増加したが、あいさつをしている表情が暗い児童がいたこと、顔を見て挨拶ができていない児童がいたため実施した。自分のあいさつが果たして本当に気持ちのいいものかということを考えるきっかけになった。これらのエクササイズを経て、校門の前であいさつしてくれる児童が増加し、「今日は〇人にあいさつしたよ」と報告してくれる児童や廊下で自主的にあいさつ活動をしている児童も見受けることができた。

(2) 第 3 回～第 6 回

5 月からは修学旅行も控えていたため、第 3 回～第 6 回は班や隣の児童と交流するエクササイズを行った。第 3 回目は聖徳太子ゲームを行った。聞こえた日本語を英語にして解答させることで英語に触れさせた。数人の代表者が出て、同時に文字を言うが、その声の大きさの差などにより、うまく聞き分けることが難しかった。協力しながら活動している班や英語の得意な児童が活躍している班があった。「さすが、〇〇!」というように、英語が得意な児童を褒めるような発言をしていた。第 4 回目、第 6 回目には二者択一を行った。選ぶほうは同じでも選んだ理由が違っているなど、人それぞれ違った考え方があることに気づかせるとともに、ペア学習を筆者は意識してこのエクササイズを設定した。授業において自分の考えや理由などを授業の中で交流させてもあまりうまくいかなかったため、話しやすい内容でのペアでの学習とした。第 5 回目はサイコ

ロトーキングを行った。授業の中で班活動を行っても、参加できていない児童がいたことから、参加できるようにこのエクササイズを行った。みんなで自分の経験を話したり、友達の経験を聞いたり、楽しそうに活動できていた。また、児童の話に対して、ほかの児童は質問を行うなどして、交流を深められていた。

(3) 第7回～第9回

第7回目からは、学級全体での交流を目標にエクササイズを行ってきた。第7回目では、好きな教科でビンゴゲームを行った。誰が何の教科が好きなのかということや、人気の教科が何なのかを知ることができたという意見があった。実際に、英語を使いながら勉強できて楽しかったという意見もあった。第8回目は、英語で月名を学習し、自分の誕生日を英語で言うという活動があったことから、「バースデートレイン」を行った。児童たちが目標にしていた時間より、早くトレインを作ることができた。結果として、一人だけ場所を間違えてしまった。その際も、その児童を責めるような発言・行動をする児童はおらず、「気にしないでいいよ」と声をかけることができていた。最後の第9回目は、「猛獣狩り」を行った。何度か繰り返すうちに、「同じ人ばかりで固まったら、面白くないやん」という児童がいた。学級全員が親睦を深めようと、意識しながら活動しようとしている児童がいたことが成果だといえる。

4.3 ワークシートからの分析

SGE 実践後のワークシートのふりかえりの中から、英語で SGE を行った成果がうかがえる代表的な記述をいくつか抽出した。

①SGE の成果とわかる記述

「他者理解」に関する記述

- ・人それぞれみんな違う意見を持っていたいいなと思った
- ・好きなのは一緒でもそれぞれの理由があるから、人は興味深いなと思いました
- ・みんなのことをいっぱい知れてよかった
- ・友達の知らなかったことをきけてよかったです
- ・もっと聞いてみたいなと思いました
- ・あまり知らない友達の“楽しかったこと”が聞けてよかった

「自己主張」に関する記述

- ・自分のことを話したりできてよかった

「自己受容」に関する記述

- ・話したことがなかった友達と話せるようになった
- ・男の子とも一緒にできてよかった

「信頼体験」に関する記述

- ・みんなで考えながら、問題に答えていくのが友との協力だなと思った
- ・あまり仲良くなかった子もチームみたいになれたのでよかった
- ・クラスの人だけでなく協力していきたいです
- ・困っている人がいたら、助けてあげたいです

「感受性の促進」に関する記述

- ・あいさつをすれば、みんなの仲も深まるし、みんながいい気持ちになる

・とてもいろんな人と仲良くしゃべれるチャンスだったし楽しかったです

ワークシートからは、「他者理解」・「信頼関係」に関する記述が多く見られ、自分自身の成長を記述している児童もいた。しかし、「自己主張」に関する記述はあまり見られなかった。自身の成長を記述する児童もいた。

②英語で SGE を行った成果とわかる記述

(1)話しやすく楽しい

- ・英語で話したら、いつもより楽しいあいさつができた
- ・英語であいさつされたら、うれしかったし、交流が深められた
- ・‘Hi!’ といいやすかった
- ・‘Year!’ というと返してくれた

(2)協力できて楽しい

- ・英語がわからない人がいても、協力して考えることができた
- ・英語での書き方がわからなかったけれど、書き方を学ぶことができた
- ・みんなで英語に直して書くのは難しかった

(3)学べて楽しい

- ・英語を使いながらゲームするのは面白かった
- ・英語を学びながら、楽しむことができた
- ・英語で言えるようになってよかった
- ・英語を聞きながら、遊ぶことができた
- ・たのしかったし、こんなに遊んでいるのに英語がもっと覚えられそう

英語を話したり、学べたりすることで楽しいという記述が多かった。エクササイズをゲームととらえている児童が多く、楽しんで活動できたようである。英語のほうがいやすかったという児童もいた。

5. 考察

(1) SGE の実践について

授業でペア学習を行った際に、はじめの頃（4 月上旬）は、自分の考えが相手と違っていただけで、書いてあった自分の考えを消して隣の児童と同じ考えに書き直すといった場面が多く見られた。しかし、実践を重ねる中で、自分の意見を消さずに、相手に説明している場面も見られるようになった。これは SGE を通して、自分の考えとほかの児童の考えは必ずしも同じではないということを経験したからである。SGE の中で、他者の意見や考えを聞いたり、交流したりする中で、自分とは違った考えがあることを知ることができたからこそ、自信をもって話せるようになったといえる。また宿題などで、分からない問題があった際に、これまでは筆者のところに聞きに来ていたが、仲の良い友達や隣の友達に教えてもらう機会が増えた。他者との対話を経験することによって、自分で学ぶだけでなく、ほかの児童からも学べると知ることができたのではないかと考える。

特に高学年になると、一緒に行動する友達が固定化され、グルーピングされてくる。児童たちは、自分が孤立しないために何らかのグループに属している場合が多い。しかし、児童たちにとって、常に同じグループで行動することを望んでいるのだろうか。必ずしも同じグループにいる

ことを望んでいるわけではなく、学級の友達みんなと仲良くしたいと思っているだろう。「話したことのなかった友達と話すことができた」や「男の子とも一緒にできてよかった」という記述から、普段あまり話さない児童と話すことができたことへの喜びや自分の成長をうかがうことができる。このことから、仲良くしたいと思っていなくてもなかなか自分から話しかけられない児童にとって、SGE は多くの児童と関わるきっかけとなっていることを確認することができた。

(2) 英語を用いた SGE の実践について

まず、文部科学省による「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査」では、「英語の授業は好きですか？」という問いに対し、小学生（1～6 年生）の 75%以上が英語の授業が好きと肯定的な解答をしている。学年別にみていくと、1 年生が 88.8%、2 年生が 87.3%、3 年生が 84.3%、4 年生が 76.8%、5 年生が 71.5%、6 年生が 63.2%となっている。このことから、学年が上がるにつれて、英語の授業が好きと解答している児童の割合は減っていることが分かる。しかし、「英語のゲームをすることが楽しいか？」といった質問に対し、小学生（1～6 年生）の 93%以上が楽しいと解答し、6 年生でも 88.8%の児童が楽しいと解答している。このことから、英語のゲームをすることは 6 年生であっても楽しいと感じている児童は多い。

筆者の実践を行った 6 年生の学級でも、英語が好きと解答した児童は、67.7%と文部科学省の行った調査とほぼ同様の結果がみられた。また、SGE のふりかえりの中でも「英語を学びながら、楽しむことができた」など、英語のゲーム（エクササイズ）が楽しかったと記述していた児童が多かった。

しかし、SGE のエクササイズは、ただ面白かったあるいは楽しかっただけで終わってはいけない。シェアリングを通して、「自己理解・他者理解」を促すことが重要である。エクササイズの中で、楽しみながら、どういう体験をさせてあげたいのかというねらいをもたせることが教師の役目である。児童のふりかえりの中で、ほかの児童のことを知ろうとしていることが分かる「他者理解」に関する記述などが多くあったことは成果である。

とりわけ高学年になってくると、思春期に入り、大きな声であいさつしたり、発言したりする児童が減る傾向にある。あいさつのエクササイズを行った際に、「いつもより楽しくあいさつができた」や「英語のほうが言いやすかった」という記述から、英語のほうが、他の教科に比べ、発言やコミュニケーションがとりやすい児童がいることが分かる。「好きな教科を聞く」といった SGE は、日本語で行うのは発達の段階にあっていないが、英語だと自然に聞くことができていた。今回の実践から英語のほうが抵抗なく活動や授業に取り組める児童もいることが分かった。

(3) これからの外国語科について

英語を用いた SGE を通して、エクササイズが楽しいということや英語のほうが話しやすいということが児童の記述から分かった。川井田ら（2016）は、「自己表現と他者理解を繰り返していくことにより、人間関係が構築されていく。この自己表現・他者理解を行うのがコミュニケーション活動である。英語を使っていろんな友達とコミュニケーション活動を行うことによって、その楽しさに触れたり、コミュニケーションの大切さに気付くようにする」と指摘している。SGE で自己表現と他者理解の経験をさせることによって、児童同士のつながりをつくることができる。そして、児童同士のつながりができ、お互いのことを知り、助け合ったり、信頼したりすることによって、授業の中での学びあう関係に近づいていくのである。

以上をもとに、文部科学省の示してしている「コミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を、育成することを目指す」という外国語科の目標に加え、つながりのある学級集団をつくるための外国語科の授業イメージとして以下に図 4 を示した。15 分のモジュール授業の中で、SGE を実践することにより、自己表現と他者理解が進み、児童同士のつながりが構築される。同時に 45 分の授業では、聞くこと、読むことといった言語活動を通してコミュニケーションを図る基礎となる資質・能力を学ぶことができる。このサイクルを繰り返していくことにより、つながりのある学級集団をつくることができる。

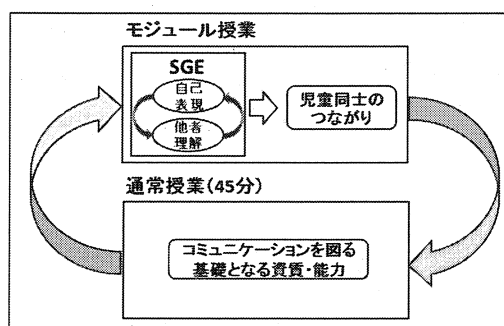


図 4 つながりのある学級集団をつくるための外国語科の在り方
出典：川井田ら（2016）「外国語活動における「コミュニケーション能力の素地」を養うための授業づくりに関する実践研究～個への関わりと場の設定の工夫を通して～」を参考に筆者作成

6. おわりに

本研究の目的は、英語を用いた SGE を行うことにより、つながりのある学級集団をつくることであった。実際に行ったことにより、成果や実践していく中での課題を見つけることができた。アクティブラーニング型の授業を行うためには、児童同士のより良い人間関係が必要不可欠であると考えている。2020 年度から外国語が教科化されていくが、今回の実践を生かした外国語科の授業づくりに励むとともに、学級の中のよりよい人間関係の構築について学び続けていきたい。

引用・参考文献

- ・石井順治（2004）『「学びあう学び」が生まれるとき』世織書房。
- ・石田淳一ほか（2016）『「学びあい」の算数授業「35+10」分モデル』明治図書。
- ・片野智治（2007）『構成的グループエンカウンター研究 SGE が個人の成長におよぼす影響』図書文化。
- ・川井田大輔ほか（2016）「外国語活動における「コミュニケーション能力の素地」を養うための授業づくりに関する実践研究～個への関わりと場の設定の工夫を通して～」『長崎大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第15号，pp.331-341。
- ・文部科学省（2008）『小学校学習指導要領解説 特別活動編』東洋館出版社。
- ・文部科学省（2010）「英語教育改善のための調査研究事業に関するアンケート調査」
http://www.mext.go.jp/a_menu/kokusai/gaikokugo/_icsFiles/afieldfile/2010/12/06/1299796_1.pdf（2017/12/12 閲覧）
- ・文部科学省（2014）「英語教育実施状況調査」
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2016/04/05/1369254_1_1.pdf（2017/12/14 閲覧）
- ・文部科学省（2016）「グローバル化に対応した英語教育改革実施計画」
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/004/siryo/07091203/001/007.htm
（2017/12/12 閲覧）
- ・大場浩正（2015）「協同学習に基づく英語コミュニケーション活動が英語学習意欲や態度に及ぼす影響:テキストマイニングによる分析」『上越教育大学研究紀要』第34巻，pp. 177-186。
- ・國分康孝監修（1999）『エンカウンターで学級が変わる Part③小学校編』図書文化。
- ・國分康孝ほか（2004）『構成的グループエンカウンター辞典』図書文化。
- ・佐藤学（2003）『授業を創る 学びが変わる 教師たちの挑戦』小学館。
- ・佐藤雅彰（2003）『公立中学校の挑戦 授業を変える 学校が変わる 富士市立岳陽中学校の実践』ぎょうせい。
- ・Dale, Edgar（1946）*Audio-Visual Methods in Teaching.*:NY:Dryden Press.